

資質・能力の育成に向けたマインドセット をつくり、学年・学校全体で共有する

2018年度1学年の指導について、4校の実践を見てきたが、
ここでは、各校で指導の中心を担った教師が集まり、実践を通じてどのような成果や気づきがあったのか、
それらを今後の高1指導にどう生かしていけばよいのかについて語り合った。



大分県立杵築高校

1学年主任
声刈信司
あしかり・しんじ

実践は P.18 ~ 21 参照

兵庫県立相生高校

1学年主任
荒内秀明
あらうち・ひであき

実践は P.14 ~ 17 参照

東京都・私立郁文館高校

進路指導部
西谷知穂
にしたに・あきほ

実践は P.10 ~ 13 参照

青森県立青森高校

進路指導主事
笠井敦司
かさい・あつし

実践は P.6 ~ 9 参照

● 指導方針や枠組みをつくり、
教師間で共通理解を図る

—— 4校の実践の共通点の1つに、
指導方針や枠組みに関する共通理解
を教師間で図ることが挙げられます。

● 声刈 青森高校の「ルーブリック作
成のための概念図」(P.7図2)は、
資質・能力の育成の考え方が視覚
化されていて分かりやすく、それ
によって先生方の足並みがそろって
いるのだと思いました。保護者にも、
自校の教育活動の意義を明確に説明
できそうです。本校も1学年の目標
に「きつき力」を掲げていますが、
学校として育成を目指す資質・能力
の明確化と、それを共有する重要性
を改めて感じました。

● 笠井 本校がその概念図を作成した
のは、資質・能力の育成において教
科学習と探究学習はつながっている
のに、両者の学びを別々に捉える傾
向が教師にあったからです。そこで、
「習得」から「活用Ⅱ」までが教科で
学ぶ段階であり、生徒自らがそこで
培った知識・技能を教科横断で活用
する学びである「探究」を行うこと
で「青高力」(P.7図1)が高まる
という「育ちのプロセス」を示しま

*プロフィールは2019年3月時点のものです。

した。それを基に、「青高力ルーブリック」とコンピテンシー・ベースのシラバスを教師全員で作成したことで、教科学習と探究学習が同じ育ちのプロセスにあるものだという指導のマインドセットができました。

西谷 教科学習などとの関連性を見いだせず、探究学習を独立した活動として捉えている教師は少なくないと思います。本校ではSDGs（*1）を教育活動の軸とする方針を打ち出し、教科学習とNIE（*2）や探究学習などを結びつけるようにしました。例えば、教科の授業でSDGsに関連づけた説明を盛り込んだり、NIEのワークシートをSDGsの17項目を示したものに改訂したりしています（P.12図1）。生徒は、学習の目的を見いだしやすくなったと思います。

荒内 本校でも、「グランドデザイン2018」（P.17図4）の作成後、教師間の教育活動の共通理解がより深まり、教育活動の内容をグランドデザインを基準に考えられるようになりました。例えば、探究学習の発表会は、主体性や表現力を育む場になるからと、その司会を生徒に任せることになりました。すると、立候補

者が4人出てきて、その中には普段は控えめな生徒もいました。生徒が多様な経験をする機会を広げられたと思います。その一方で、本校では校内でのスマートフォンの使用が禁止であり、パソコン教室の利用も制限があるため、eポートフォリオの導入に時間がかかりました。関係する分掌と連携し、特定の時間に限り、生徒が校内で自分の端末を使えるようにするなど、合意形成をすべきでした。新たな取り組みは、早めに関係者に相談することが大切になると、次の1学年団には伝えたいです。

●教科・科目を超えた実践の共有が指導の足並みをそろえる

——教育活動の具体的な内容を共有する方法も、各校とも様々な工夫をされていて、教師間の指導の足並みをそろえる鍵になっていました。

笠井 定期考査の問題は、各教科会議で共有するようにしています。単なる報告に終わらせず、出題内容が適切かどうかをシラバスに照らし合わせて検討するといったことが、指導改善に結びついています。

荒内 本校では以前から、定期考査

の問題をパソコンの共有フォルダーに入れて、全教師が見られるようにしています。18年度は、3年生が「大入学共通テスト」の試行調査を受検したこともあり、思考力や表現力を評価する問題について、学年や教科・科目を超えて話す機会が増えました。例えば、英語科の教師が、地理歴史科の教師に授業で扱っている内容を聞き、それを素材に作問していました。また、生徒の素晴らしい解答は、周りの教師にも見せて共有することもよくあります。

西谷 本校では、中学校入試で適性検査型入試の試験問題を作成しています。思考力や表現力を評価する教科横断型の問題ですが、作問過程で他教科の考え方に触れることになり、その経験が、新しい学力観に応じた定期考査や課題の作問に生きていると感じています。例えば、高校1年次の「論文」の学年末課題では、多くの図表からデータを読み取り、問題発見と問題解決の力を測る、国語と社会を融合した問題を出しました。

芦刈 どの教師も手探りで作問している状態だからこそ、教科・科目を超えた共有が重要で、本校でも、全教科・科目の定期考査の問題を学

年団で共有しましたし、19年度の1学年団にも引き継ぎました。共有の場があったことで、理数系科目が教科書の内容の習得を先に進めることを重視するあまり、思考力や表現力を評価する問題が手薄になりました。例えば、青森高校が作成されたテストの出題配分表（P.8図4）のように、出題方針を明確に示すことは有効な方法だと思います。

笠井 本校では、地元国立大学のAO入試や個別学力検査の問題を見せ、既に思考力・判断力・表現力が問われていることを先生方に示して、授業や定期考査の転換を促しました。ただ、教科・科目の特性も、足並みをそろえることを難しくしている要因だと思います。

●これまでと違うからこそ、保護者の理解が一層重要に

荒内 保護者とも、大学入試改革の状況を共有することが一層重要になると感じています。本校では、保護者会でeポートフォリオについて説明した際、「なぜ、全員入力しなければならぬのか」といった質問が

*1 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。①貧困をなくそう、②飢餓をゼロになど、17の目標と169のターゲットから成る。*2 Newspaper in Education の略。新聞などを教材として活用する教育活動。

ありました。大学入試が多面的・総合的評価になることは学年通信などを通じて保護者にも伝えていきましたが、個人情報取り扱いへの意識が高く、eポートフォリオの必要性に納得できないうちは、子どもに力させることに抵抗があったようです。ただ、eポートフォリオは、今後の大学入試で確実に必要であり、3年生の入試直前に作成できるものではないと説明し、生徒が不利にならないよう理解を求めました。

芦刈 本校でも、修学旅行の行き先の変更やeポートフォリオの導入など、保護者の経済的負担が増えるため、変更や導入の意義を丁寧に伝えました。大学入試がどう変わるかはまだ不透明な部分も少なくないと率直に伝え、だからこそ、eポートフォリオ、「志四海プロジェクト」(P. 20 図2)、定期考査の改善を進めると説明したところ、保護者の方々に賛同していただきました。

● ● ● ノウハウを持つ人材を 活用し、見通しを立てる

大学入試改革の具体的な内容が
徐々に見えていく中、手探りで進め

られたことも多かったです。

芦刈 本校では、年度当初にすべての教育活動の内容を決め込まず、できることから始めて、情報をつかみながら軌道修正をしていきました。長期休業中にも学年団が集まり、入手した情報を伝え、対応を検討する機会も設けました。そうした中、早い段階でポートフォリオの作成を教育活動の軸に据えたのはよかったです。

3年間の過去の自分と比較して成長したと
実感を持たせるために、
ポートフォリオを活用していきたい。 **芦刈**



ランドデザインを基準に考えることで、
各教育活動の目的が明確化し、
効果的な取り組みが行えるようになった。 **荒内**

思います。思考力などは、生徒それぞれに水準も成長の度合いも異なりますから、他者との比較ではなく、過去の自分との比較で力が高まったと実感させることが最も大切です。3年間で経験する学習や学校行事など、すべての活動をポートフォリオでつなげるために、全生徒が確実に記録できるよう、ログインの手順から丁寧に指導しました。学年目標の

「きつき力」は、自分の成長に気づく力でもあることを、3年生の最後
に実施予定の、自身の成長を発表す
る会の後に種明かしする予定です。

荒内 新しい教育活動では、そのノ
ウハウを持つ人材の活用がポイント
だと思います。本校では、「総合的
な学習の時間」で相生市と連携した
探究学習を始めました(P. 15 図1)。
本校初の試みでしたが、前任校で探
究学習を指導した教師が学年団にい
たので、その教師が中心になって指
導計画を立て、活動を具体化してい
きました。全くの手探りではなく、
最初に筋道が立てられたことで、安
心して指導にあたれました。

西谷 確かに、しっかりと計画が
あることで、先生方は安心して指導
できますし、それが効果的な指導な
のかをPDCAサイクルの中で検証
することができます。本校で新たに
行うことになった「PBLツアー」
でも、探究学習との関連性において、
明確な枠組みを作成しました。新し
い取り組みでは臨機応変な対応も大
切ですが、指導の継承と検証のため
には枠組みも必要だと考えて、統一
したプリントを活用するといった工
夫をしています。

● PDCAサイクルを回し、
● 目標の達成度を検証

笠井 今思うのは、教育活動の検証は、年1回ではなく、委員会などを行う度に行えばよかったということです。それが、先ほどから課題に挙げられている、教師間・教科間の足並みをそろえることにつながると思いました。本校では17年度から、「青高力」の設定、ルーブリックとシラバスの作成、授業と定期考査の改善と、段階的に改革を進めてきました。そのすべての過程に教師全員がかかわることで「青高力」への理解が徐々に深まりましたが、その教育目標をどれだけ達成できているかについても、教師一人ひとりが自身の教育活動を検証することが必要です。

荒内 指導の検証には、生徒の声を聞くことも重要だと思います。本校では、数学の授業進度を例年よりも速めたところ、2学期末に生徒から負担が大きすぎると言う声が上がりました。そこで、教科内で話し合い、3学期は1週間ごとの復習に重点を置いた指導を行う方針を立て、小テストなどで知識・技能の定着を図るようにしました。その結果を見て、

大学入試の変化の本質を捉えることが、
指導改善につながる。

笠井



教育内容・方法の枠組みを明確化し、
PDCAサイクルの中で
成果や課題を検証することが大切。 西谷

今後の指導を検討していきます。

● 学校全体で指導を継承する
● 仕組みをつくる

—— 18年度の取り組みの成果や課題を踏まえて、これからの高1指導を考えることが重要になります。

笠井 本校では、管理職、各分掌・学年団の代表から成る「キャリア教

育委員会」が学校全体の仕組みを整え、学年団が実践するという手法を採ってきました。18年度に行ってきた教育活動は、成果が分からない中で次の1学年団に継承するため、学校として指導を蓄積する仕組みが必要だと考えたからです。新たな教育活動は指導方針を立てるだけでも大変ですから、それを委員会が行うことで、学年団は生徒の指導に集中で

きます。そして、学年団から実践の状況を吸い上げて、委員会で検証し、改善策を考えた上で、次の1学年で行うという体制を整えました。

芦刈 確かに、学年団は担当学年の指導で手いっぱい、成果や課題を検証し、次の1学年団に引き継ぐことは難しいのが現状です。学校全体での教育活動とするためには、学校組織を工夫する必要があるでしょう。

西谷 現在は、新しい学力観に応じた教育のあり方を、個々の教師が試行錯誤している段階です。学校全体の取り組みとして新しい教育活動を定着させるためには、すべての教師がその目的を十分に理解することに加え、どの教師でも実践できる共通のデザインをつくり上げる必要があると思います。

笠井 大学入試の変化の上面だけを見て指導を変えて、それで対策をしていると勘違いしてはいけないと、皆さんの話を聞いて改めて思いました。一連の教育改革や大学入試改革の目的が資質・能力の育成にあるという本質を理解し、それを学校全体で共有した上で、指導のマインドセットをすることが、今後の教育活動に必要なのではないのでしょうか。